

坂口安吾の「墮落論」

——スペイン語翻訳のために——

Traducir al español *Sobre la decadencia*, de Ango

Sakaguchi

オルネド ルシア

Lucía HORNEDO

はじめに

日本が第二次世界大戦に敗北して間もない一九四六年、「墮落論」で坂口安吾が大流行作家になった。このエッセイは当時の国民の気持ちや状況を明確に描き、その言葉は激しいインパクトをもたらした。「墮落論」で安吾が隠さずに宣言したのは、長年に抑圧されていた国民がとて公然と表現できるものではなかったからである。歴史探偵ともよばれた坂口安吾は、それまでタブーとされていた当時の多くの日本人が抱いた混乱、憤り、そして未来への希望などの感情を鋭く理解し巧みに表したのである。

日本の現代史と社会をより深く理解したいスペイン語圏の読者は、安吾のこのエッセイを読むべきである。当時の日本人の声を聞かせる安吾の言葉は、普段語られていない重要な現実の側面を露わにする非常に大切な資料であるからである。本稿では未だスペイン語に翻訳されていない「墮落論」をスペイン語圏の読者に紹介したい。

本研究ノートでは坂口安吾の「墮落論」と「続墮落論」の主な問題点を簡潔にまとめ、安吾の絶望的な言葉はなぜ力強い表現力をもつのかを考える。そして翻訳作業の際に生じる問題の解決方法を考え、この安吾のテキストを適切にスペイン語圏読者に伝える方法

を考察したい。

そのために本研究ノートを三つの節に分ける。まず戦中の考えを含めて坂口安吾を簡潔に紹介し、次に「墮落論」と「続墮落論」の重要な問題点について論じる。最後に翻訳作業の際に生じる問題の解決方法を考察し、スペイン語圏の読者がこのエッセイを理解するために必要な脚注の情報を作成する。

1 人物坂口安吾

1.1 伝記ノート

坂口安吾は一九〇六年に新潟に生まれた。坂口家は大地主であったが、安吾が生まれた頃は父親が政治家として財を傾けたため、家計が極めて厳しかった。両親との関係は親しくなかったが、安吾は漢詩を書いていた父親から本に対する関心を得たのであろう¹。学校の時代にはあまり勉強せず、彼の筆名はその態度に業を煮やした漢文の先生につけられた渾名に由来する。先生は本名であった柄五の「柄」を「暗」に取り替え、皆が彼を「アンゴ」として呼ぶようになった²。後に安吾は「暗」を「安」にした。

一八歳の時に、求道に対する憧れが強まり、仏教を勉強しようと東洋大学印度哲学学科に入学した。悟りをひらこうと自分に厳しい生活を課し、結局神経衰弱に陥った。その後フランス語を猛然と勉強することによって克服した。アテネ・フランセに通い、フランスの芸作品を愛読する。そのとき「短歌などを試作していた安吾が、ようやく文学者たらんことを意識的に志すようになった」³。当時の安吾は他人から自信の溢れた人間のように見られたが、実は霊肉の葛藤などに悩み、自信を喪失していた。

二四歳のときに処女作「木枯の酒倉から」(一九三〇)を発表し、そして「風博士」(一九三一)や「黒谷村」等によって「坂口安吾は異例の輝かしい芸術派の新人としてデビューした」⁴。

一九三二年に新進女流作家矢田津世子を知り、激しいプラトニック・ラブに陥った⁵。四年間に酒場のマダムなどと同棲するデカダンスな生活を重ね、ようやく矢田津世子と別れ、京都に移った。その過去を埋めようと『吹雪物語』を書いた。自分の才能に絶望し、この長編小説を書く過程はかなり辛かった。『吹雪物語』はあまり売れなかったため、安吾は自信を喪失し、新しい小説を書けなく、ほぼ毎日酒を飲み、暮ばかりしていた。その間に日本は「戦争下」となった。京都、取手、小田原に転々と放浪し、一九三九年に暇であった安吾は東京へ行ってみた。そこで見た「風景」や「モノ」によって、「安吾さんはその精神にぐんと驚き⁶、書き続ける元気をもたらした。戦中に発表した作品の中から「真珠」や大胆な「日本文化私観」が特に重要である。

空襲下の東京に残った安吾は、「敗戦後の昏迷の中で、いち早く戦後の本質を把握洞察した」⁷。一九四六年に「墮落論」や「白痴」を発表し、多くの読者に衝撃を与えた。安吾は石川淳、織田作之助、太宰治、檀一雄とともに「無頼派」と呼ばれ、「戦後乱世のオピニオン・リーダーとして、交流作家、評論家になる」⁸。

数年間にわたって、激しい執筆活動に生活を捧げる。しかし安吾は『墮落論』において予言した通り、「人々は経済復興、生活安定とともに堕ち切ることをやめ、時代と妥協し安吾を時代遅れの狂人として見捨てたのだ」⁹。安吾は四九歳のとき脳溢血で急死した。

一九七〇年代に安吾は若者たちによって再評価され、大きく復活した。

1.2 常に通説を批判した坂口安吾

一九三〇年代初頭に雑誌で発表された坂口安吾の処女作は注目されたが、それから「墮落論」までには彼の論文や小説はあまり反響を呼ばなかった。しかし安吾は戦前や戦中に不節制な生活を送り

ながらも、作家の活動を中断せず、政府と軍が押し付けた考え方を露わに批判する幾つかの作品を残した。

戦中に多くの作家が従軍記を書き、文芸家協会に参加したが、安吾は一流の作家ではなかったせいか「従軍記者にも愛国運動の講師にも(…)安吾さんにお呼びのかかるはずもなかった」¹⁰。もちろん、自ら参加することもなかった。一九四二年六月に開催された「日本文学報国会」では文学者にも日本国民の全員とともに一丸になって戦うことを要求された。安吾はそれに加わるどころか、同年一月発表の「文章のカラダマ」(空弾)と五月発表の「文芸時評」というエッセイでは、文学者の報道班員としての戦地派遣などは何の役にも立たないと述べ、戦意を高めるには、文学より祖国の軍隊行進曲の方が効果的であるという¹¹。

これに関しては、戦時下の作家の役割について論じる一九四三年発表の「文学と国民生活」も著しい。検閲や発禁に従わないで、「作家は自身を以てただ文学に専念すべき」¹²であると結論する。検閲や紙不足のため出版社の状況がだんだん厳しくなっていたが、安吾は書き続けた。一九四一年から寄稿し始めた左翼系の雑誌『現代文学』の終刊まで毎号のように作品を発表、座談会にも積極的に参加するなど深くかかわり¹³、驚くように日本降伏の直前の八月一二日、東京新聞に「予告殺人事件」というエッセイを発表している¹⁴。

このように安吾は決心し、戦中にタブーとされていた「死」という話題についても露骨に論じる。一九四一年発表の「死と鼻唄」の最初の一行で、安吾は次のように切り込む。

戦争の目的とか意義とか、もとより戦争の中心となる題目はそれであっても、国民一般というものが、個人として戦争とつながる最大関心事はただ「死」というこの恐るべき平凡な一字に尽きるに相違ない¹⁵。

半藤が指摘するように、「戦場で死ぬことは名誉この上ない、『天皇陛下、バンザイ』のそんなときに」¹⁶安吾は「常人は『必ず死ぬ』となれば怯える」¹⁷と宣言した。

この節で「日本文化私観」について触れないわけにはいかない。一九三九年に発表したこの論文は、坂口安吾の思想を理解するための最も重要な文章の一つであるのみならず、本研究で分析する「墮落論」の由来ともなっている。彼自身はこのエッセイについて次のように述べている。

私がいわば思想の星雲状態から現在に至る生き方を思想的に定着させた作品、私はいわば「日本文化私観」によって私の生き方を確立したのであったが、それが発展して青春論となり、これが第二部、戦後の墮落論その他へ発展したものであった¹⁸。

戦前に日本は集団的な熱狂に陥っていて、神国日本はアジアで新秩序を築く役割を持っていたと信じられていた。友人あての書簡では、安吾がこの状況を「魔性の歴史は人々の脳裏に幾千となく蜃気楼を現し、時代政治屋に狂態の踊を踊らせ、人々を険崖に追いつめる」¹⁹と書く。その集団的な熱狂の中でドイツ人の建築家ブリーノ・タウトが『日本文化私観』という本を書き、安吾の「日本文化私観」はタウトの本のパロディーのかたちで書き、タウトが礼賛する日本文化を問う。

このエッセイの重要な問題点を簡潔にまとめる。まず安吾は「伝統とは何か？国民性とは何か？」²⁰と「日本的」という概念を問う。日本人は日常生活では伝統を守るよりは、便利なものを求めていると論じる。「伝統の美だの日本本来の姿などというものよりも、より便利な生活が必要なのである。京都の寺や奈良の仏像が全滅しても困らないが、電車が動かなくては困るのだ」²¹。

次は相撲や舞妓より、安吾は野球や寄席演芸のような俗悪なものを好むと声明する。理想化されていた日本に対する見方を反論し、

実は寺や庭がただ滅ぶもので、「無に如かざる」精神の結果であると主張する。「京都や奈良の古い寺がみんな焼けても、日本の伝統は微動もしない。日本の建築すら、微動もしない。必要ならば、新たに造ればいいのである。バラックで、結構だ」²²。

そして文学に関しては、「人は孤独で、誰に気がねのいない生活の中でも、決して自由ではないのである。そうして、文学は、こういう所から生れてくるのだ、と僕は思っている」²³。

最後に「美」について論じる。法隆寺や平等院のような虚しい美よりは、必要性に応じるドライアイス工場の建物の方が美しいという。安吾にとっては「美しさのための美しさは素直でなく、結局、本当の物ではないのである。要するに、空虚なのだ」²⁴。

それに対しては、安吾の文学はドライアイスの工場と軍艦と同じく、必要性にだけ応じると述べる。

美しく見せるための一行があってもならぬ。美は、特に美を意識して成された所からは生れてこない。どうしても書かねばならぬこと、書く必要のあること、ただ、そのやむべからざる必要にのみ応じて、書きつくされなければならぬ。ただ「必要」であり、一も二も百も、終始一貫ただ「必要」のみ。

そうして、この「やむべからざる実質」がもつめた所の独自の形態が、美を生むのだ²⁵。

この論文の実質を巧く説明した奥野が述べるように、「戦争下これほど伝統美を批判し現実的、合理的精神を貫抜いた勇気と、精神のフレキシビリティと自由さにぼくはただ驚嘆するだけだ」²⁶。安吾のように聡明な言葉で露骨に体制批判をすることは、当時は考えられなかったのである。

2 「墮落論」の特質

「墮落論」と「続墮落論」は一九四六年四月と六月に『新潮』で発表された。この二つの論文は坂口安吾が戦前と戦争下の間に体験・考察した結果の聡明な表現である。上述したように、彼の考え方は通説に対し常に批判的であったが、戦争が勃発したときから予言していた日本の敗北が実際のものとなり、今度は国家主義の欺瞞に対する深い怒りも露わになる。

しかし政治に対する訴えのみならず、このエッセイには人間についての鋭い考察も含まれている。実は安吾は空襲されていた東京から疎開しなかった。それは「私は戦争を『見物』したかったのだ」²⁷という理由である。極限の状況で生きようとする人間の本質を勉強したかった。「こうして安吾さんが危機に直面しながら”人間”なるものを学んでいるうちに、東京はもう完全な焦土の広がりとな」²⁸った。同年に発表した「白痴」にも空襲下の生活を語っている。

戦争が終わり帝国主義から解放された日本は彼の言葉を受け入れられるようになり、半藤が指摘するように、今度は坂口安吾の出番となった²⁹。

以下「墮落論」と「続墮落論」の重要な問題点を分析したい。

2.1 政治について

安吾が作家活動の少ない時期を歴史の勉強に捧げた結果、当時の日本事情に関する彼の考察は、日本史の深い知識を持った視点からなされることになった。安吾は歴史探偵とも呼ばれ、織田信長、豊臣秀吉、宮本武蔵などについて書いた作品も注目されている。半藤が指摘するように、安吾は歴史的な人物の野心、執念、裏切り、卑劣、謀殺、阿諛迎合を詳しく勉強し、「安吾さんの見た戦時下の日本人の姿がそっくりそこにある、といえるのではないか」³⁰とも言われている。

A) 天皇制

まず「墮落論」と「続墮落論」における坂口安吾の「天皇制」についての考察を見ていきたい。天皇の名において戦っていた神国日本は、天皇制を中心として動いていたのはいうまでもない。安吾はその柱であった「天皇」という立場を問うために、その歴史的な由来を掘り下げる。

それは「日本の政治家達(貴族や武士)は自己の永遠の隆盛(それは永遠ではなかったが、彼等は永遠を夢みたであろう)を約束する手段として絶対君主の必要を嗅ぎつけていた」(54)³¹というのである。つまり支配層は天皇という存在を利用し、自分たちの位置を確保した。さらに「続墮落論」では「天皇制といふものは日本歴史を貫く一つの制度ではあったけれども、天皇の尊厳といふものは常に利用者の道具にすぎず、真に実在したためしはなかった」(続 272)と付け加える。前年まで天皇は神的な存在であるとされていたと考えれば、安吾の訴えは画期的であるといえる。これは先述した「死」に関する討えと深く関係している。実は天皇のために死ぬ必要はなかったのだ。日本人は死の束縛から解放された。

そして「天皇制に就いても、極めて日本的な(従って或いは独創的な)政治的作品を見るのである」(54)と述べる。その作り物は天皇によって生み出されたものではなく、政治家が作り出したシステムであると主張した。これは天皇の戦争責任論という問題とつながる。「墮落論」では「この戦争をやった者は誰であるか」(53)と自問する。引き続き「続墮落論」では「それは遠い歴史の藤原氏や武家のみの物語ではないのだ。見給え。この戦争がそうではないか。実際天皇は知らないのだ。命令してはいないのだ。ただ軍人の意志である」(続 273)とはっきり述べる。

しかし、「天皇を使用したのは支配層の人達だけではなく」(続 274)、国民もそうであった。

我々国民はさのみ天皇を崇拜しないが、天皇を利用することには狎れており、その自らの狡猾さ、大義名分というずるい看板をさとらずに、天皇の尊厳の御利益を謳歌している。何たるカラクリ、又、狡猾さであろうか。我々はこの歴史的カラクリに憑かれ、そして、人間の、人性の、正しい姿を失ったのである(続 274)。

中畑邦夫が説明するように、「安吾は天皇制を、国民に『押しつけられた』ものであると同時に、国民はみずから天皇制を受け入れた(…)。無意識のうちに天皇制を受け入れ、また無意識のうちに天皇制を使用してきた」³²のである。つまり何も考えず、自分を問わず、そのシステムの一部になっていたことによって、加担者となっていたといえるであろう。

このように坂口安吾の天皇制論は、「文学者のほとんどの天皇制論を超えているというふうに考えている。権力の中枢にいる、支配層の保守的政治家の感覚に近い、そんな天皇制観を持っていると感じている」³³と松本健一が評価する。

B) 今後の政治の制度

押し付けられた天皇制から解放する必要があると安吾は抗議した。日本人は「天皇を担ぎださずにはいられなくなるであろう」と認めたが、「自分自身の天皇をあみだす」(59) 必要があったと述べた。(そのために墮落するべきだと述べたが、墮落に関しては後ほど論じる)。「続墮落論」でもっと詳しく説明する。

天皇制が存続し、かかる歴史的カラクリが日本の観念にからみ残って作用する限り、日本に人間の、人性の正しい開花はのぞむことができないのだ。(…)我々はかかる封建遺性のカラクリにみちた「健全なる道義」から転落し、裸となって真実の大地へ降り立たなければならぬ(続 274)。

いいかえるなら、加担者のような態度をやめて、責任をもってまず

自分、そして日本を改めて作る必要があるというのである。

しかし安吾にとっては、正しい答えは他の政治制度には見つけられないのであった。それは「蓋し、政治は、人間に、又、人性にふれることは不可能なのだ」(続 276)からである。安吾の政治に関する観点は悲観的というより、絶望的であった。これに関して、「墮落論」の最後の文章はこのように明確である。「墮ちる道を墮ちきることによって、自分自身を発見し、救わなければならない。政治による救いなどは上皮だけの愚にもつかない物である」(60)。

実は坂口安吾はアナーキストであった。安吾の政治思想に関しては、柄谷行人が次のように説明する。

彼のアナーキズムは、いわば、啓蒙主義の徹底化にほかならないのである。(…)したがって、事態は、左翼的か右翼的かという軸ではなく、啓蒙主義的かロマン主義的かという軸で見られるべきである。そうすると、安吾が「左翼的」でなかったとしても、徹底的な合理主義者、啓蒙主義者であることがわかる。³⁴

2.2 墮落する人間

墮落という概念はこの二つのエッセイのキーワードであるのみならず、安吾自身が体験した精神状況の表現でもある。上述したように、「墮落論」は戦争下の経験を基にして書かれており、これに関して半藤は「墮落論」は「私小説として読むことができる」と指摘する。そして「安吾の太平洋戦争とは、空襲体験と同義といったほうがいいのかもかもしれない」³⁵と加える。

一八歳で仏教を勉強し、悟りをひらこうと厳しい修行生活を続けた結果、精神衰弱に陥り、また処女作を書いた後自分の作品にあまり自信がなく落ち込んでいたときなど、騒然たる安吾の魂はどん底に落ちる時期がいくつかあった。戦中は「私の魂は荒廃していた」³⁶と「魔の退屈」で描いたこともあった。一九四四年に「そのときはもう

日本の負けることが明らかな時で」³⁷、以前愛していた矢田津世子の死亡を知り、深い悲しみを感じた。しかし「私の心に、気鋭なもの、一つの支柱、何か、ハリアイが失われていた。私はやぶれかぶれになった。あらゆる生き方に、文学に。そして私の魂の転落が、このときから、始まる」³⁸と決心した。

「墮落論」における「墮落」という概念の扱い方に関しては、ドナルド・キーンが指摘するように矛盾するときもある。その逆説的な表現を使用することによって、恐らく新しい倫理を作るより、古い倫理を揺るがそうとしたのではないかとキーンは解釈する³⁹。しかし、それだけでなく、その矛盾的な部分は危機に立ち向かう魂の状況も非常にリアルに描こうとしたためでもあろう。自分を深く問うときの魂の激しいよろめきを劇的に表しているといえる。

戦争が終わり、人間はまた人間らしくなれるが、その状態を超えるのは単純な過程ではないということも安吾が指摘する。まず墮落する必要がある。正しい人間の姿に戻るために唯一の道があり、それは「墮ちる」こと、「墮落」することである。安吾にとっては墮落するというのは、恥ではなく、極めて人間的なことである。「人間だから墮ちるのであり、生きているから墮ちるだけだ」(59)。墮落することによって、人間の本物の姿が発見できる。「墮ちる道を墮ちきることによって、自分自身を発見し、救わなければならない」(59-60)と結論する。さらに「続墮落論」では、「墮落論」のこの最後の文章に次のように加える。

私は日本は墮落せよと叫んでいるが、実際の意味はあべこべであり、現在の日本が、そして日本的思考が、現に大いなる墮落に沈淪しているのであって、我々はかかる封建遺性のカラクリにみちた「健全なる道義」から転落し、裸となって真実の大地へ降り立たなければならぬ。我々は「健全なる道義」から墮落することによって、真実の人間へ復帰しなければならぬ。

天皇制だの、武士道だの、耐乏の精神だの、五〇銭を三〇銭にねぎる美德だの、かかる諸々のニセの着物をはぎとり、裸となり、ともかく人間となって出発し直す必要がある(続 274)。

坂口安吾のこの概念について多く論じてきた。ジョン・ダワーは次のように述べる。「なによりまず、墮落にたいして謙虚になることによるのみ、人々は新たな、もっと本物の道義性について考えることができるはずである」⁴⁰。

戦争下の安吾を詳しく描いた半藤の次の言葉は、「墮落論」の實質を巧くまとめている。

人間の、そして文化の、この壮絶にして壮大な死と破壊こそが、未来の輝かしい創造へとわれわれを導いてくれる、と戦争下の大人安吾さんはしっかり考えていたようなのである。

今日の戦争というバカげた大破壊から、きっと明日の真の人間と文化の創造が生まれる。いまこそはまさしく歴史の偉大なる転換点なり⁴¹。

このように「墮落論」と「続墮落論」は生の表明である。暗い時期が終わり、希望に溢れる叫び声であるといえる。

A) 人間へ戻る

柄谷行人が述べるように、「安吾はいつも『人間』について語る」⁴²。「人間が変わったのではない。人間は元来さういふものであり、変わったのは世相の上皮だけのことだ」(52)という言葉で始まる「墮落論」もそうである。

しかし「人間の、又人性の正しい姿とは何ぞや」(続 274)と自問する安吾は、「墮落」という概念と同様に、これに対しても曖昧な答えしか出さない。ただ明瞭であることがあればそれは、人間へ戻るには「日本及び日本人は墮落しなければならぬと叫ぶ」(続 274)。または「かかる諸々のニセの着物をはぎとり、裸となり、ともかく人間となっ

て出発し直す必要がある」(続 274)。

安吾における「人間」について論じる柄谷行人は「安吾において、『墮落』とは他者との関係にさらされるということを意味する」と述べる。さらに『『人間が変わらない』という安吾の『人間』は、構造以前のものである。それは『他なるもの』の経験そのものにほかならない」⁴³。つまり「人間」を定義するには、人々同士の関係は重要となる。まさにそれは安吾が空襲下に観察した人間関係である。これに関して半藤が次のように述べる。「平和な安穏な時代には見えてこない人間の心の奥底にあるもの、普通は隠されているもの、それが苛酷な戦争ゆえに自然と見えてしまったまでで。つまりそれは人間というものである」⁴⁴。

また島田によると、「安吾のいう“人間”は控えめな自画像であると同時に、人間を語る形而上学や宗教意識、道徳、主義を一切拒絶したところに立つ“ただ生きる人間”なのである」⁴⁵。安吾の人間に関する圧倒的な理解力は、哲学を学んだ人の鋭い観察の結果と言えよう。

すくなくとも、安吾の生への愛着は明らかである。自分の姪の自殺や東京裁判で宣告されていた将軍の姿を考えると、「生きるといふ事は実に唯一の不思議である」(58)という結論に達する。

何が人生の魅力であるか、私には皆目分らず、然し恐らく私自身も、もしも私が六十の将軍であったなら矢張り生に恋々として法廷にひかれるであろうと想像せざるを得ないので、私は生という奇怪な力にただ茫然たるばかりである(56)。

これを考慮すると、「墮落」という概念はポジティブな側面もあるといえる。

歴史に失望した安吾は人間の弱さを訴える。武士道を例として、自分の弱さを自覚しているからこそ人々は非人間的な規則を作ると主張する。しかし人間の心には、圧力されていた制度を改めて考え

直し、再起できる力も持っている。「墮落」という概念と同様に、安吾の「人間」に対する考え方も矛盾するところもあるが、最終的に希望を持ってるといふ方向に向かっているといえる。戦争中には人々は自由に考えることができなかつたが、戦争が終わって、未亡人や特攻隊も抑圧から解放されて、自由を返されて、日本人は「人間へ戻ってきたのだ」(59)。

2.3 文学の役割

本研究ノートの対象である「墮落論」では文学の役割について直接に触れず、「続墮落論」でも簡潔に展開するのみである。しかしその安吾の考え方は二つのエッセイを貫く意図といえるだろう。

上述したように、安吾は正しい人間の姿は何であるのかという問題にはっきり答えてはいない。しかし、引き続き、人間の幸福について論じ、安吾にとっては、この二つの概念は強く結びついていると見えてくる。そこに文学という活動が出てくる。

人間の幸福は、政治を選ぶことや、ある国家に属する気持ち等には存在しないと安吾は論じる。

人間の真実の生活とは、常にただこの個の対立の生活の中に存しておく。この生活は世界聯邦論だの共産主義などというものが如何ように逆立ちしても、どう為し得るものでもない。

しかして、この個の生活により、その魂の声を吐くものを文学という。文学は常に制度の、又、政治への反逆であり、人間の制度に対する復讐であり、しかして、その反逆と復讐によって政治に協力しているのだ。反逆自体が協力なのだ。愛情なのだ。これは文学の宿命であり、文学と政治との絶対不変の関係なのである(続 277)。

文学活動は墮落、つまり人間へ戻る過程へ貢献するといえよう。まさに健全な国家があるためには、自由で責任をもった文学が不可

欠であるといえるだろう。

2.4 当時の「墮落論」の受容

「堪え難きを堪え忍び難きを忍び」と日本が降伏した。戦争が終わり、日本人は天皇制という束縛から自由になった。それは何よりも「死」から解放されたという意味であった。ジョン・ダワーは次のように説明する。「このように憔悴しきっていた多くの日本人にとって、『解放』とは、当座のところ政治的というよりは、むしろ心理的な意味をもっていた。(…)ほとんど文字どおり、日本人は生命をもう一度与えられたのである」⁴⁶。しかし、自分の命を更新できるようになるまでに、まず日本人は「虚脱」という状態に陥っていた。今まで専門用語としてしか使われていなかったこの単語は、民衆が苦しんでいた「疲労と絶望」を表現するようになった⁴⁷。

こういう痛ましい環境の中に沈んでいた日本人は坂口安吾の「墮落論」を読むことによって、熱狂から目が覚め、生き返るために必要な力を得た。「これまでのように、天皇のため、国のために死ななくてもよい、命を捨てるほどの超越的なものなど、もうこの世にはないと覚ったのが、わたくしたちの戦後のスタート」⁴⁸ と半藤は述べる。死ぬことへ恐怖を感じる、破壊へ無反応になることも恥ではなく、非常に人間的であると宣言した安吾の言葉を読み、戦後を迎えられるようになった日本人が多かった。

一九四六年に二四歳であった編集者と作家の野原一夫によると、「墮落論」で書いていることは現在の読者にとっては当たり前と思われるかもしれないが、当時の日本人にとってはそうではなかった。

このエッセイが書かれた敗戦直後の日本においても、これは健全な常識論であった。いや、健全な常識論であるべきはずものだった。しかし、古い道徳や習性の殻をなお破れずにいる世の多くの大人たちにとっては、これは健全な常識論ではありえな

かった。「墮落」という、あくどい響きを持った大袈裟な言葉を安吾が敢て使ったのには、そのような世の大人たちへの揶揄と叛逆が籠められていた⁴⁹。

さらに、「これも現今では大方の常識だろうが、天皇制に関する議論が禁忌とされていた時代に育ち、“天皇の軍隊”の一員として戦争を戦った私にとって、(…)安吾の意見には目から鱗が落ちると思いがした」⁵⁰と想起する。

そして当時二〇歳であった文芸評論家の奥野健男は「墮落論」を読んで感じたことを次のように述べる。

敗戦後の昏迷の中にいたぼくに電撃のごときショックを与えた。あれほど爽快かつ鮮烈な衝撃を、ぼくは読書から生涯二度と受ける事は無いであろう。これほど、時代の精神的な中し、人々の魂の刻心を射抜いた、影響力の大きい、効果的な発言をぼくは知らない。少くともぼくはこのエッセイを読んで、長年にわたってぼくにとりついていた戦争という憑物から自由になり、はじめて人間らしくものを考える力をとりもどしたと言ってよい⁵¹。

引き続き、この受け取り方は彼だけではなく、「あの頃、二〇歳前後だった世代の多くの人々は、『墮落論』から、ぼくと同じような衝撃を受けたと思われる」⁵²と加える。

「墮落論」が特に注目を集めたのは発表から数年間であったが、七〇年代には安吾の作品が再発見された。これに関してドナルド・キーンは次のように述べる。一九六〇年代に活動し、がっかりした若者は、安吾の作品における不満や独断論から取り去ろうとする粘りが特に優れたと思ったのではないかと説明する⁵³。

現在は坂口安吾のエッセイは当時の日本を理解するための不可欠な資料としてみなされている。戦後日本の研究者ダワーはその評価を次のように認める。「日本の長い歴史のなかでも時代の本質をもっとも見事にとらえた作品であると評価する批評家もいる」⁵⁴。

3 スペイン語翻訳のために

以下はこのエッセイのそれぞれのキーポイントをどのようにスペイン語に訳せばいいのかを考え、翻訳作業の際に生じる問題の解決方法を説明していきたい。

3.1 翻訳する際に生じる問題点

3.1.1 主張としての歴史事実について

人間ではなく、変わったのは世相であるという論拠で始まる「墮落論」。それを例証するため、万葉集に集成された歌を歌った当時の兵士と彼らを見送った女たちの場面と、次に第二次世界大戦に戦った特攻隊と彼らを見送った女たちの場면을対照的に並べる。過去の事実と当時の事実の間に類似を定め、主張を展開していくという弁証法はこの二つのエッセイの重要な特徴である。他には、非人間的な道徳を押し付けられた戦争未亡人と武士、また自分の利益のために天皇制を利用した藤原氏や将軍家と代議士諸公も例として挙げられるだろう。

このように歴史を使用し、安吾は戦中の支配的な考え方に反論していた。以上の弁証法的な主張の他には、例えば戦中に賛美されていた「農村文化」を批判することがある。「農村文化」は実は大化改新の頃から変わっていきなく、「他への不信、排他精神というものは農村の魂であった」と、純朴とされていた農村精神という考え方を否定する。彼らの「受身のずるさが、孜々として、日本の歴史を動かしてきたのであった」(続 271)と訴える。

この主張方法を駆使することによって、まず国家・軍国主義の考え方を支えた理論を分解し、大日本帝国の誇張した表現を非神話化している。そして読者は今まで距離を持って語られていた偉大な人物を今度は同じ人間として同じ目線で見ることができた。安吾の

言葉はまさに帝国の神秘性を取り除く。

さて日本歴史を詳しく知らないスペイン語圏の一般的な読者に向けて、「墮落論」の力強い表現方法に由来する独特な歴史の扱い方をどのように伝えればいいのかであろう。これに関しては 3. 2 に詳しく論じる。

この節で最後に考察したいのは万葉集の引用の翻訳である。この部分を伝えるには、脚注だけではなく、テキストの中での扱いも困難である。(脚注に関しては、3. 2 で説明する)。まず日本語のテキストに括弧などの記号を使っていないが、翻訳ではこれが引用であることが分かるように、何かの印が必要となる。「”」は強すぎると思うが、この部分はイタリック体で書くのはいい選択であろう。文体に関しては、この部分のスペイン語の表現は「古い詩」の響きを持つべきである。キーンが指摘するように、古風な言葉と口語体を組み合わせることによって、戦争中のプロパガンダとして使われていた万葉集に対するアイロニーが著しい⁵⁵。

3.1.2 反対概念の対置について

この二つのエッセイには安吾が、長年に押し付けられていた日本人の非人間的な状況をはっきり訴える。そのため例えば上述したように歴史と現代の例を使用する。しかしその主張は一律であるどころか、常に反対する概念を対置していくのである。ジョン・ダワーはこれに関しては次のように述べる。

坂口が人を訴えることができたのは、ひとつには先の戦争が心理的には魅力があったことを率直に認めたからであった。

巨大な破壊がもつ、うっとりさせるような壮大さ、運命に従順な人々もつ「奇妙な美しさ」について彼は書いた。そして同時に、坂口は同じ情熱をもって、それを否定した。⁵⁶

また 2. 2 で述べたようにキーンもこのエッセイの矛盾を指摘する。

「墮落論」の矛盾的な文体は、このエッセイの表現力の力強さのもう一つの重要な点としてみなしてもよい。まず上述したように、この曖昧な表現方法は自省の過程をリアルに描いているのである。また、人間的に考えることが禁止されていた時期を経て、このような表現方法は必要となっていたといえよう。疑問をもつのは悪いことではなく、非常に人間的なことであると安吾は言いたかったのではないか。日本は戦争に負け、今まで言われてきたことは嘘であったと気づきはじめる多くの日本人は、同じく疑問ばかりをもっていたであろう。安吾自身にその答えがあったとしても、それは自分にしか役に立たないものであっただろう。これから日本人一人ひとり自分の答えを見つめるべきであったと安吾も知っていた。

スペイン語の訳にこの曖昧な表現方法を伝えるべきであり、そのために矛盾する箇所はそのまま訳す必要がある。スペイン語では同じ言葉を繰り返すことを避けることが普通であるが、この場合は類語を使わず、重要な概念は同じ単語で示さないといけないのである。その際はできる限りテキストが読みづらくならないようにするのが適当であろう。

3.1.3 日常性について

安吾は複雑な問題を深く考察するが、その概念をわかりやすく伝えるには、上述したように、現代の日常的な例を使う。その親近感、両方のエッセイによく使う口語体的な表現にも見られる。

政治家達の天皇への拝み方については次のように述べる。「我々にとっては実際馬鹿げたことだ。我々は靖国神社の下を電車が曲るたびに頭を下げさせられる馬鹿らしさには閉口した」(54)。そして、同じ段落で「馬鹿」という言葉を六回も使用している。

「続墮落論」の次の文章もこういうダイレクトなスタイルである。「人間の一生ははかないものだが、又、然し、人間というものはベラボー

なオプチミストでトンチンカンなわけの分らぬオッチョコチョイの存在」(続 277)。この仏語をカタカナで書き、庶民のレベルで使うことによって、エッセイの表現は親しげになり、読者がさらにテキストに入りやすいのである。

そして「墮落論」の最も有名な文章の一つ、「生きよ墮ちよ、その正当な手順の外に、真に人間を救い得る便利な近道が有りうるだろうか」(58) には、動詞の命令形を使うことによって、読者はその言葉を直接に受け入れるのである。

この絶望的な文体で語っている安吾は、国民の叫び声を描きかけたのではないか。しかし人間のための救いもあると述べているので、愛情を込めた訴えでもあるといえる。

スペイン語でも率直さを伝えるには、ふさわしい口語を探し、話し言葉と文語との間に適切なバランスを見つける必要がある。

3.2 脚注と付録⁵⁷

以上に論じてきたように、「墮落論」は文学作品でありながらも、エッセイでもある。むしろエッセイとして扱った方が正しいのではないか。従って翻訳の文章には脚注を挿入することはふさわしいと思われる。

「墮落論」では日本事情への言及が多く、その知識のないスペイン語圏の読者には、このエッセイを理解することは困難になる。安吾がほのめかす人物や出来事がある程度説明しないと、このエッセイが伝えようとするメッセージがほとんどなくなる。しかしその言及が多いため、毎回脚注を挿入すると、逆に読書を邪魔する恐れがある。これを考慮すると、付録という形で理解する上で必要となる情報を付け加えるのが最もふさわしいと考えた。最初に出てくる歴史的な人物のところに脚注を挿入し、それ以降付録を参考するように指示する。

A) 脚注

歴史的な人物以外の説明は、脚注というかたちで入れることにする。

万葉集の引用の場合は、詩集のことだけではなく、明治以降このテキストが歪曲されたことも触れるべきである。フォンリュブケ留奈子が指摘するように、「万葉集は明治以降に日本人の国民性・アイデンティティの定義を支える『文化装置』として発明された」⁵⁸のである。戦中には「万葉集における『日本人の資質』は軍国主義に基づいた国家のプロパガンダに濫用されることになる。軍は万葉集におさめられている古代兵士の歌を濫用し、『忠君愛国』や『敬神思想』を奉り挙げ、戦争に対する自己犠牲を美化した。その格好な道具として使われた」⁵⁹と説明する。しかし、それだけではなく、「生還できぬ立場にある若い学徒達にとって、万葉集に描かれた恋愛や家族愛や故郷への慕情をかき立てる歌は、この世で最後の儂いオアシスのようなものであったに違いない」⁶⁰。

これを脚注では簡潔にまとめてみた。

万葉集：七世紀後半から八世紀後半にかけて編まれた日本に現存する最古の和歌集である。明治以降に（一八六八～）日本人の国民性・アイデンティティの定義を支えるように使用され、戦争中には軍国主義に基づいた国家のプロパガンダに濫用されることになる。

靖国神社の場合も説明する必要がある。明治二年（一八六九）に創建された靖国神社は、「国家のために尊い命を捧げられた人々の御霊を慰め、その事績を永く後世に伝えることを目的に創建された神社」⁶¹である。言い換えるなら、靖国神社では幕末および明治維新以後の国事に殉じた人々の霊を合祀しているため、戦争下の日

本では国民を「天皇の軍隊」に結びつける絆の役割を果たした。

満州事変から日中戦争へと、侵略戦争を拡大した日本は、国内では戦時体制を強化し、思想統制、宗教統制は日ましにきびしさを加えた。満州に傀儡国家「満州国」をつくった日本は、中国大陸に深く侵攻したが、中国の軍民の抗戦によって戦没者が激増した。靖国神社の役割は、「聖戦」完遂の精神的支柱としてますます重要度を増やした⁶²。

そして「靖国」という社号に関しては、「明治天皇の命名によるもので、『祖国を平安にする』『平和な国家を建設する』という願いが込められている」⁶³るのである。

脚注では次のように説明した。

靖国神社: 明治天皇の命令で一八六九年に建てられた神社。国事に殉じた人々の霊を合祀しているため、戦争下の日本では、「聖戦」完遂の精神的支柱として国民を「天皇の軍隊」に結びつける絆の役割を果たした。

B) 付録

四十七士: (忠臣蔵、赤穂事件) 武士階級に発達した道徳である武士道における、最も有名な伝説である。主君浅野内匠頭(あさのたくみのかみ) 長矩の恥辱をそそぐため、その家臣たちが、浪人としてのちも、四十七人が結束して、吉良上野介(きらこうずけのすけ)を討った事件。その後四十七人は切腹した。この事件は様々な作品・演劇の上で取り扱われてきた。またこの事件についての評価は、近代日本において教育の上でも、忠教の手本とされた⁶⁴。戦後に、仇討ちを美化しているこの伝説は、封建的な武士道の礼賛になると判断され、日本で占領政策を実施した連合国軍機関であるGHQによって、この作品は歌舞伎の演目などから禁止された。

小林秀雄（一九〇二～一九八三）文芸評論家、作家。独特の言語論・自意識論を軸とする彼の評論は、文芸評論史上画期的なものであった。一九三〇年代、時流に乗ったマルクス主義文学への最も鋭い批判者となった。戦争下には、「国民」を説いて、積極的に戦争にコミットした。その中から、菊池寛らによる文芸銃後運動の一員として、戦争を支援するため川端康成、横光利一ほか 五二人の小説家とともに日本国内、朝鮮および満洲国を訪問し幾つかの文章を残している⁶⁵。

東条英機（一八八四～一九四八）軍人、政治家。明治期陸軍の戦略家として知られる父の東條英教中将与同じく軍人の道を進んだ。一九三一年に参謀本部編制動員課長となり満州事変の勃発に際会した。一九三三年に陸軍省軍事調査部長に就き、一九三七年に関東軍参謀長となり、一九三八年に陸軍次官に就任する。能吏ぶりを発揮して「かみそり東条」と言われた。一九四〇～一九四一陸軍大臣を勤め、一九四一に内閣総辞職に導いた。東条は第二次世界大戦に日本の国家元首である。

宮本武蔵（一五八四～一六四五）江戸時代前期の剣客。二天一流兵法の祖。武蔵が執筆した『五輪書』には、一三歳から二八、九歳まで六〇余度の地流仕合を行い、一度も利を失わなかったと記している⁶⁶。宮本武蔵はとりわけ日本の戦士である。そのイメージを作ること大きな役割を果たしたのは、吉川英治（一八九二～一九六二）が執筆した『宮本武蔵』という小説がある。一九三五年から連載小説として始めたが、非常に売れたため、一九三六年から一九三九年の間に順次行本として刊行され、ベストセラーになった。この作品は死を高く意義づけるような記述などがあり、戦争賛美文学としてみなしている。「このような文章は、戦時体制が計作られていく社会状

況に適合的であったということが出来る」⁶⁷。

武士道:武士の道德。武士道における「死」の概念はこのエッセイとの関わりが著しい。「武士論の説く、忠の不忠の、義の不義という議論は、私を捨て切れず生命に執着する人間に、生きのびることを正当化する理屈を用意するものであって、死ぬ事のみにおいて真実に生きうとするものである」。さらに「『死ぬ事』は単に主君に対するものではなく、『死ぬ事』事態における私的に生命への執着をこえる精神の貴さの追求である。明治の武士道は、「基本的には士道的な立場に立つものであるが、特に注目されることは封建的主従関係場に形成されたものを、天皇を中心とする国民の道德としてとり上げ、(…)いわゆる国民道德の中核に組み入れられたことである」⁶⁸。

豊臣秀吉（一五三七～一五九八）安土桃山時代の将軍。百姓の身分から織田信長に仕え、戦功をたて、信長の家臣の中で最も重要な一人となる。信長の死後、四国、九州、関東、奥州を平定して天下を統一した⁶⁹。朝鮮にも二度にわたって出兵したが失敗し、関ヶ原の戦い、二度の大坂の陣をへて一族は徳川家に滅ぼされた。

大井広介（一九一二～一九七六）文芸評論家、野球評論家。一九四〇年に『現代文学』を創刊、安吾は一九四一年からこの雑誌に作品を発表。大井は一九四〇年の大晦日、浅草の雷門で安吾と会い意気投合する。以後、安吾は月のうち一〇日は大井家で過ごすようになり、書庫にあった探偵小説を片っ端から読み、三国志演義なども読む⁷⁰。

徳川幕府（江戸幕府）一六〇三年から一八六七年まで二六五年

間続いた、徳川氏の全国統治の覇府。武家政治史上、最も高度に組織された強大な統一政権であった。武士はすべて主君に仕えて家臣団に編成され、土地・人民は検地と兵農分離により、領主の権力下に強く支配されて武家経済を負担した⁷¹。京都には天皇と朝廷があって、幕府はそれを権威として利用して温存した。社会は「士農工商」（武士・農民・職人・商人）という順で身分が固定されていた。

松永弾正：松永久秀（一五一〇～一五七七）織田信長と同時代の武将であり、織田家の一武将として戦うが、二回ほど信長を裏切り敵に回る。最後は信長に背いたが、ついに抗しきれず自殺した⁷²。裏切り、暗殺など悪逆の限りをつくすが、連歌や茶道に長けた教養人であり、領国に善政を敷いた名君として知られている。

終わりに

現在の日本を再構成し戦後時代を理解するには、坂口安吾の「墮落論」は読む価値がある。今までスペイン語に訳されていないこの作品を、スペイン語圏読者に母語で届ける重要性を指摘したい。それはこの文章から支配層の状況だけでなく、敗北した日本の人民が感じていたことが非常によく伝わってくるからである。一般的に正しく認められている歴史の教科書を補い、歴史を異なる視点から改めて考察するには、このエッセイは一般の読者にもそして歴史の研究者にも価値があると強調したい。

安吾の言葉はとでも人間的である。当時の日本を理解できるだけでなく、どこの国の社会に通用するものである。人間の歴史は一番下のところから始まるという安吾のメッセージは、社会や政治的な不確実性の溢れる不安な現代にも通用する。人間は自分で反省し、自分の限界を自覚することによって再び何かを始めることができるという希望に満ちた考えは、現在の世界でも有意義であろう。

【注】

- 1 Donald Keene, *Dawn to the west, Japanese Literature of the Modern Era (Fiction)*, Holt, Rinehart and Winston, Canada, 1984, p. 1065
- 2 兵藤正之助『坂口安吾』講談社、1976年、31-32頁
- 3 檀一雄「作家論」『底本 坂口安吾全集 第七巻』冬樹社、1970年、659頁
- 4 「坂口安吾」『日本近代文学大事典 第二巻』、講談社、1977年、89頁
- 5 同前
- 6 半藤一利『安吾さんの太平洋戦争』PHP文庫、2013年、111頁
- 7 「坂口安吾」前掲『日本近代文学大事典 第二巻』90頁
- 8 同前
- 9 同前
- 10 半藤一利前掲書、129頁
- 11 同前、188-189頁
- 12 坂口安吾「文学と国民生活」『底本坂口安吾全集第十三巻』冬樹社、1970年、90頁
- 13 坂口安吾デジタルミュージアム：http://www.ango-museum.jp/info/archives/ar_biography_04_01.htm
- 14 半藤一利前掲書、297頁
- 15 坂口安吾「死と鼻唄」『底本坂口安吾全集第七巻』冬樹社、1970年、106頁
- 16 半藤一利前掲書、158頁
- 17 坂口安吾「死と鼻唄」前掲『底本 坂口安吾全集 第七巻』107頁
- 18 坂口安吾「『墮落論』後記」『底本 坂口安吾全集 第八巻』冬樹社、1970年、556頁
- 19 半藤一利前掲書、185頁
- 20 坂口安吾「日本文化私観」『墮落論』角川文庫、2013年、8頁
- 21 同前、12頁
- 22 同前、33-34頁
- 23 同前、36頁
- 24 同前、43頁
- 25 同前、42頁
- 26 野原一夫『人間 坂口安吾』新潮社、1991年、655頁
- 27 半藤一利前掲書、272頁

-
- 28 同前、 279-280 頁
- 29 同前、 304 頁
- 30 同前、 231 頁
- 31 「墮落論」と「続墮落論」の引用が多いため、参考情報は文章の中で指摘する。「墮落論」の場合は（頁数）、「続墮落論」の場合は（続頁数）というかたちで指摘する。全ては坂口安吾『坂口安吾全集 第四巻』筑摩書房、1998 年から引用する。
- 32 中畑邦夫「天皇制と供儀のシステム坂口安吾の天皇制批判について」『麗澤学祭ジャーナル』Vol. 19, No 2 2011 年、80 頁
- 33 松本健一「坂口安吾とナショナリズム」『安吾からの挑戦状』坂口安吾論集 II 坂口安吾研究会、ゆまに書房、2004 年、12 頁
- 34 柄谷行人「安吾とアナーキズム」『越境する安吾』坂口安吾論集 I 坂口安吾研究会、ゆまに書房、2002 年、8 頁
- 35 半藤一利前掲書、282 頁
- 36 坂口安吾「魔の退屈」『坂口安吾全集 第三巻』筑摩書房、1998 頁
- 37 坂口安吾「二七歳」前掲『坂口安吾全集 第三巻』316 頁
- 38 同前、 333 頁
- 39 Donald Keene 前掲書、p. 1077
- 40 ジョン・ダワー（三浦陽一・高杉忠明訳）『敗北を抱きしめて』岩波書店、2004 年、181 頁
- 41 半藤一利前掲書、273-274 頁
- 42 柄谷行人「墮落について」『安吾坂口と中上健次』太田出版、1996 年、68 頁
- 43 同前、 67-68 頁
- 44 半藤一利前掲書、281 頁
- 45 島田雅彦「衛生学としての“安吾文学”」『太宰治・坂口安吾の世界 叛逆のエチカ』柏書房、1998 年、233 頁
- 46 ジョン・ダワー前掲書、92 頁
- 47 同前、92 頁
- 48 半藤一利前掲書、311 頁
- 49 野原一夫『人間 坂口安吾』新潮社、1991 年、16 頁
- 50 同前、 18 頁
- 51 奥野健男「解説」『底本 坂口安吾全集 第七巻』冬樹社、1970 年、649 頁

-
- 52 同前、 649 頁
- 53 Donald Keene 前掲書, p. 1080
- 54 ジョン・ダワー前掲書、180 頁
- 55 Donald Keene 前掲書、 p. 1075
- 56 ジョン・ダワー前掲書、180 頁
- 57 本節では、「墮落論」にだけ対象を絞る。
- 58 フォンリュブケ留奈子、『『万葉集』に見られる大正・昭和初期の日本人論』アルザス日欧知的交流事業日本研究セミナー「大正/戦前」報告書、3 頁
- 59 同前、 5 頁
- 60 同前、 5-6 頁
- 61 靖国神社のホームページ : <http://www.yasukuni.or.jp/history/index.html>
- 62 村上重良『靖国神社 1869-1945-1985』岩波ブックレット No57、岩波書店、1987 年、26 頁
- 63 靖国神社のホームページ : <http://www.yasukuni.or.jp/history/index.html>
- 64 「赤穂事件」『国史大辞典 第一巻』吉川弘文館、1991 年、112-114 頁
- 65 「小林秀雄」『日本近現代人名辞典』吉川弘文館、2001 年、432 頁
- 66 「宮本武蔵」『国史大辞典 第十三巻』吉川弘文館、1991 年、505-506 頁
- 67 櫻井良樹『宮本武蔵の読まれ方』吉川弘文館、2003 年、69 頁
- 68 「武士道」『国史大辞典 第十二巻』吉川弘文館、1991 年、151-152 頁
- 69 「豊臣秀吉」『国史大辞典 第一〇巻』吉川弘文館、1991 年、458-460 頁
- 70 坂口安吾デジタルミュージアム
ム:http://www.ango-museum.jp/info/archives/ar_biography_04_01.html
- 71 「江戸幕府」『国史大辞典 第二巻』吉川弘文館、1991 年、330-337 頁
- 72 「松永久秀」『国史大辞典 第十三巻』吉川弘文館、1991 年、150 頁